

安楽寺だより

第53号

紙面内容

- 2面 報恩講法要厳修(荒山信師)
- 3面 「皆極悪深重の凡夫」坊守
- 4面 日本仏教史(補足)蓮如上人9

あけましておめでとうございます
お釈迦さまのお話が続きます

第12回 お釈迦さまのお弟子 —舍利弗と目連—

お釈迦さまの仏教教団の拠点である「竹林精舎」が誕生した頃、マダガスカル国のラージャクリハ(王舎城)には、バラモンの指導者・サンジャヤのもとでシャヤーリプトラ(舍利弗)とモツガラナ(目連)が修行に励んでいました。

ある日、舍利弗は、お釈迦さまのお弟子・アツサジが町で托鉢をしている時に出会い、その教えを聞きました。

アツサジは、『お釈迦さまの教えは、この世に存在するすべての事柄は、何等かの原因(因)があり、それを助ける条件(縁)があって成り立つ、そして滅びるといふ変化の過程にある。人間の苦しみ・不安も原因があって生じるし、その原因を知れば、苦しみ・不

安を解決する道が開けてくる』という『縁起の教え』を説きました。

舍利弗はその真理の教えを理解し、友人・目連とともにお釈迦さまのもとへ行き、お弟子とられました。

お二人はお釈迦さまより少し年上だったようで、その後お釈迦さまの教団の中で、最も重要な人物となっていました。

舍利弗は、お釈迦さまの問いに正確な答えを出し、お釈迦さまがそれを肯定するという形で説法がなされました。



舍利弗(奈良興福寺蔵)

縁起の法に目覚める2人

また、他の弟子たちに教えを優しく説き聞かせたり、議論を戦わせる時には、正しい答えを教えてください。

一方、目連は、教団内の争いやトラブルが起こった時に仲裁に入ったり、体制や雰囲気を引き締める役目をしました。

お釈迦さまは、このお二人を並べて、「両者はともに比丘たちが模範とすべき秤(はかり)である」と讃えておられます。

舍利弗は、「智慧第一」と言われ、目連は、「神通第一」と言われています。



目連(奈良興福寺蔵)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話 〇五二(八四一)二六〇六

昨年十一月十三日、安楽寺本堂に於いて、報恩講法要をお勤めしました。当日は風もなく暖かい陽気の日で、大勢のご門徒の皆様に参加いただきました。全員で正信偈・念仏ご和讃を合唱和いたしました後、荒山信師（昭和区・恵林寺住職）からご法話をお聞きしました。

『如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし』（和讃）

「浄土真宗では、「一年が報恩講で始まり、報恩講で暮れていく」と言われるように、真宗門徒の歴史のなかで一年で最も大切な法要で



報恩講を勤めました

私たちは「本願」のなかで生きている

あります。私たちが一年の生活を振り返り、その日その日の日暮らしを確かめさせていただく法要が報恩講です。

ほとけさまは、『法身はいろもなし かつちもましまさず』（唯信鈔文意）つまり眼には見えないけれども、ご本願のお言葉として、はたらいてくださっています。

報恩講の鶴亀・香炉・花瓶などのお飾りは、「浄土莊嚴」といい、蠟燭・お香・お花で浄土世界をあらわしています。

親鸞聖人は、正信偈のなかで、阿弥陀さまの願い（本願）を光で顕わされています。『無量光・無辺光・・・』という十二の光で私たちが照らして下さっているのです。

阿弥陀さまは、私たちに何を願って下さっているのでしょうか。私たち一人ひとりが生まれてきた意味、生きている存在の意味を照らし出して、「生きて来てよかった人生です」と受け止めてほしいと願われています。

一人ひとりの能力・学歴・地位・名誉に關係なく、存在していること自体が尊いとおっしゃっているのが本願なのです。阿弥陀さまの教え（仏法）は、分け隔てのないものです。いつでも、どこでもだれにでも



はたらくものを仏法というのです。

お釈迦さまは、『諸行無常』と申されます。「あらゆるいのち、あらゆる人間關係、あらゆる事象は無常である。だから後悔なく大切に生きていこう。今が尊いのです」私たちは、こうした『法』のなかで生きているのです。

報恩講は、私自身の生き方を問い直す大切な法要です。」

10月の定例法話

昨年九月の暑い日に、警察官が巡回訪問に来ました。少しでも暑さが和らぐようにと玄関に招き入れたら、突然「僕が偽警察官だったらどうしますか？」と怒られました。とにかく玄関を開けずに最寄りの警察署（携帯に番号を入れておく）に電話して、名前と巡回を確認して下さいとのこと、試しに瑞穂警察に電話してみたら、「本物です」とお答えいただきました。（笑）

人を信じられないとは寂しいことです。今は闇バイトなど怖い犯罪が多発し



「皆、極悪深重の凡夫」

坊守 吉田滋代

ています。一番怖いのは「罪悪感」が無いことです。

親鸞聖人のお言葉「善人なおもて往生を遂ぐ。いわんや悪人をや」歎異抄に書かれた悪人正機です。この教えの『善人』とは、自分が善人だと思っている人、『悪人』とは、自分が悪人であると自覚している人と思ってください。私たちは皆、極悪深重の凡夫なのです。罪の意識がない人に救いが届かないのです。

先日『どうせ死ぬんだから』というタイトルに惹かれ思わず本を買いました。作者は医者様の和田秀樹さんです。なかなか興味深い内容でした。

高齢者が後悔することの6つの中に「周りにもっと自分の気持ちを伝えておけばよかった」「医者のこと聞きすぎなければよかった」（笑）が印象的でした。高齢者は年齢者でなければならぬ。出来ないことは出来なくてよいと。

そうですね、出来ることを数えれば山ほどあります。どうせ死ぬんだから、今を大切に一日一日を丁寧に、感謝して暮らしていきたいと思えます。

四〇名様を超える方にご参拝いただき、心から感謝申し上げます。

本山報恩講参拝



昨年十一月二十二日、本山東本願寺報恩講に参拝しました。四年前に二十二組の寺院・ご門徒三十四名の皆様と一緒に、安楽寺会館からバスで京都に向かいました。

予定通り本山に到着し、御影堂前の白洲で写真撮影をした後、入堂しました。今年も聖人のご真影正面に正座し、ご門首をはじめ御堂衆の称える声明を聞き、静かに参りました。

京都東山で昼食をいただいた後、清水寺に参詣しました。暖かい日和でしたので、参道は修学旅行生や外国人などの観光客で大変なにぎわいでした。

今回の報恩講団体参拝にご参加いただきました皆様には、こころよりお礼申し上げます。来年の法要にもご予定いただきますよう、よろしくお願いたします。

仏教豆知識

第五十三回



日本仏教史

補足 蓮如上人の

85年のご生涯を全うされる

⑮ 往生

蓮如上人は、明応五年(一四九六年)に摂津国東成郡生玉庄内(後の石山本願寺)に大坂御坊を建立されました。八十二歳になられた上人の隠居所としての草坊でした。

翌明応六年(一四九七年)上人は、自身の往生の遠くないのを予感し、山科本願寺の親鸞聖人御影像にいとまごいのために上洛されました。

その後、明応八年(一四九九年)三月二十五日正午、実如等の子供たちや空善坊・法教坊などに見守られながら、八十五年のご生涯を閉じられました。

蓮如上人の代表的な御文(二帖目第一通)をご紹介します。

『故聖人の仰せには、「親鸞は弟子一人ももたず」とこそ仰せられ候ひつれ。如来の教法をわれも信じ、ひとにもおしへきかしむばかりなり。これによりて、聖人は御同朋御同行とこそ、かしづきて仰せられけり。

古歌にいはいはく「うれしさを むかしはそでにつつみけり こよひは身にも あまりぬるかな」

昔は、念仏だに申せば、往生するとはかりおもいつるころなり。一向一心になりて信心決定のうえに、仏恩報尽のために念仏申すころは、おおきに各別なり。よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるころなり。あなかしこ、あなかしこ』

文明三年(一四七一年)七月十五日



大阪城公園内の蓮如上人記念碑

先日、演劇公演を見に昭和区の劇場へ行きました。コロナ禍が三年余り続きましたので、久しぶりの観劇でした。▼「煙が目にしみるー火葬場は現世とあの世の交差点」というテーマで、あの世に立つ二人の男性の会話から劇は始まりました。そして故人が自身の人生を振り返る場面、故人を見送る家族がこころの思いを叫ぶ場面は、胸を打つストーリーでした。▼私にとって火葬場は、亡き方をお送りする仕事場の一つですが、劇に出演された皆様が、湿っぽい感じではなくユーモアを交えて演じられる姿に見入ってしまいました。▼テレビドラマでは味わえない、心に深く残る素晴らしい公演でした。主役を演じられたご門徒の西岡昇さんを始め演出・制作にたずさわられた皆様、ありがとうございました。